

ギーラーン州セフィードルード川西岸の古墓群について

山内和也

On the Ancient Cemeteries of the West Bank of the Sefidrud River

Kazuya YAMAUCHI

セフィードルード川はイラン北西部にあるギーラーン州の南東部を流れる。この西岸には古代の墓域が数多く存在しているが、これらの古代の墓域はすべてセフィードルード川の支流が形成する谷筋に点在する現在の集落の傍らにある。集落は谷筋の平坦面や緩斜面にあり、古代の墓域はその上方に位置する比較的急な斜面に存在している。こうした集落は、この地域でおこなわれているコブウシを主体とした「垂直方向の移牧」の拠点である冬営地と夏営地であることから、古代においても「垂直方向の移牧」がおこなわれており、その傍らに墓域が営まれていたものと推測される。この場合、ある冬営地とある夏営地が対応関係にあるように、それぞれの墓域も同じように対応していると考えられる。このようにして、それぞれの谷筋は「垂直方向の移牧」によって有機的に関連するひとつの生活圏を形成しており、セフィードルード川の西岸もまた、こうしたいくつかの谷筋からなる一つの大きな文化圏をなす。

キーワード：セフィードルード川西岸、古代の墓域、垂直方向の移牧、冬営地、夏営地

The Sefidrud River runs through the southeastern part of Gilan province, which is located in the northwest of Iran. On the west bank of this river, many ancient cemeteries have been found along the valleys created by the branches of the Sefidrud River. The inhabitants of this region live by a transhumance along the valleys between the summer camps at higher altitudes and the winter camps at lower altitudes. All the ancient cemeteries are located on the steep slopes or hill sides beside these summer and winter camps, which situate on easy slopes or flat places. Therefore, it is supposed that in the ancient time, transhumance was practiced as now and the cemeteries were made beside both the winter camps and summer camps.

Key-words : west bank of the Sefidrud River, ancient cemetery, transhumance, winter camp, summer camp

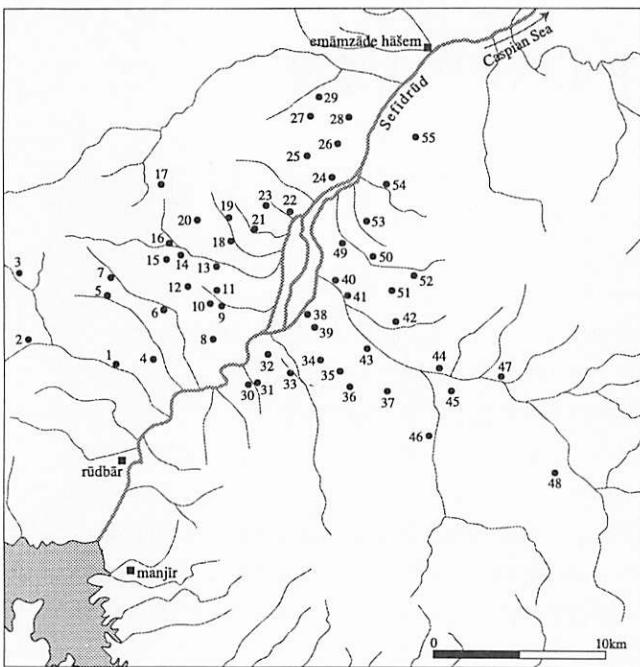
はじめに

ギーラーン州はイランの北西部、カスピ海の南西岸に位置する(図1)。このギーラーン州の南東部にあり、イラン高原からカスピ海に流れ込んでいるのが、「白い川」を意味するセフィードルード川である。この川の両岸には古代の墓域が数多く存在し(図2)、いわゆる「アムラシュの遺宝」の出土地として知られている。この両岸に位置する代表的な遺跡としてはマールリーク Marlik やキャルーラズ Kaluraz、ハリーメジャーン Halimejan が挙げられるが、これ以外にもいくつかの遺跡においてイラン人考古学者によつて調査がおこなわれている¹⁾。

中近東文化センターは1997年6～7月および1999年2～3月、ギーラーン州政府の招待を受けて、ここギーラーン州で考古学的調査をおこなうことができた²⁾。日本隊による公式の考古学的調査としては1979年のイラン・イス



図1 イラン全図



1 yeläqi	*16 dogāmiyān	31 fatlak	*46 seydān
2 läke	17 dahgerd	*32 jāzemkül (märlik)	*47 rasi
3 dōgāhe	18 pošte	*33 nesfi	*48 čombol
*4 lüye	*19 şemām	34 kelāye	49 karešk
*5 dārestān	20 emāmzāde tāher	35 lāfonsarā	50 fatkūh
6 nālūs	21 kowker	36 kāsekül	*51 sirkūh
*7 šu'uldārestān	*22 jamshidābād	37 kolesforūš	52 divras
8 ganje	23 čarpe	38 rūdābād	*53 eştalkjān
9 marzānkaš	24 kulekaš	39 kiyābād	*54 şahrān
10 bābān	25 pīrsarā	40 gāvkoš	*55 ḥalimejān
*11 jübēn	26 māziyān	*41 sendes	
12 sarāmarz	27 tūsestān	42 dīvrūd	
*13 kalūraz	28 čarmān	43 anārkül	
14 pīri	29 harkiyān	*44 daštīl	
*15 jūkin	30 fišom	*45 čorre	

*は踏査した遺跡

図2 セフィードルード川両岸の遺跡分布図

ラーム革命以後初めてのものである。この調査では上述した既知の遺跡の現状把握のみならず、これまで公表されていなかった数多くの遺跡（そのほとんどが墓址）を確認することができた。この結果、セフィードルード川西岸の古代の墓域の立地やその在り方は、現在この地域でおこなわれている「垂直方向の移牧」と密接に関係している可能性が強いことが明らかとなった。

本稿では、この踏査の成果を踏まえて、古代の墓域の立地や分布、その在り方、そして、古代の墓域と「垂直方向の移牧」との関連性について述べる。また、加えて、その関連性に基づいて推定されるいくつかの点、つまり、異なる地点に位置する墓域の相互関係などについての試論を提示していきたい。

古代の墓域の立地とその在り方

図2に示したように、セフィードルード川西岸（図3）には、後期青銅器時代および初期鉄器時代以降とされる数多くの墓域が存在している³⁾。墓域の規模はさまざまであるが、踏査によれば、こうした墓域は現在の集落、つまり冬営地や夏営地の傍ら、もしくはその下に埋もれていることが確認できた。それゆえ、図2に示した地名は遺跡の名称であると同時に、現在の集落（冬営地や夏営地）の名称でもある。こうした墓域を営んだ人々の居住址については確認できなかったが、後述するように、古代の墓域に隣接して存在することが窺われた。以下に注目すべき点について述べる。



図3 セフィードルード川西岸

1. 墓域の立地、および集落址との位置関係

セフィードルード川の西岸は、セフィードルード川に流れ込む支流が形成する5つの谷筋に大きく分けられる。これらの谷筋は、下流に位置する集落名をとって、北から「ジャムシーダーバードの谷 Darre Jamshidabad」、「キャルーラズの谷 Darre Kaluraz」、「ジューベンの谷 Darre Juben」、「ギャンジエの谷 Darre Ganje」、「ルードバールの谷 Darre Rudbar」と呼ばれている。

踏査で確認された墓域はこうした谷筋に点在する平坦面と緩斜面の上方にある比較的急な斜面に営まれている。この場合、平坦面と緩斜面には墓址の存在は確認できなかった。そのため、この平坦面および緩斜面が居住空間であり、その上方の居住に適さない傾斜が急な斜面が墓域として選ばれたものと推測される。

セフィードルード川西岸のみならず、ギーラーン州では、キャルーラズを除けばこれまで集落址は検出されていない (Hakemi 1968)。これは、イラン高原部とは異なり、この地方では木材が建築資材として多用されるためにタッペ（遺丘）が形成されないことによるものと理解されている。しかしながら、墓域の傍らに位置する平坦面や緩斜面を綿

密に調査することによって、これまで不明とされてきた集落址の存在を明らかにしていくことが可能であると思われる。

2. 墓の型式

墓の型式は「竪穴式土壙墓」、「竪穴式石槨墓」、「横穴墓」、「地下式横穴墓」の4種類に大きく分類される⁴⁾。

竪穴式土壙墓は単に地面を矩形もしくは橢円形に掘ったもので、蓋石を伴うものと伴わないものがある。竪穴式石槨墓は石灰岩の割石で構築された矩形の石槨をもつもので、これもまた、蓋石を伴うものと伴わないものがある。この竪穴式土壙墓と竪穴式石槨墓は、比較的傾斜の緩い斜面に構築されることが多いようである。横穴墓は石灰岩の岩盤に横穴を掘ったもので広い墓室をもつが、これは主に急斜面に構築される。なお、この横穴墓の場合には、開口部に石積みがされる「竪穴式石槨墓」との折衷型も多く見受けられる(図4)。地下式横穴墓もまた斜面に構築されることが多いが、これは縦坑を掘ったのち、底面から横穴を掘り込んだもので、長靴形の断面形を呈するものである(図5)。

これらの4つの墓の型式の違いは、墓が営まれる場所、



図4 竪穴式石槨墓と横穴墓の折衷型（ルーキエ遺跡）



図5 地下式横穴墓（シュウールダーレスター遺跡）

つまり、傾斜の緩急によるものと推測され、時代差を反映しているものではない可能性が高い。

聞き取り調査によれば、セフィードルード川西岸では竪穴式土壙墓と竪穴式石槨墓の場合は単葬墓のものが多いようであるが、キャラーラズでは複数の遺体が埋葬されている例も報告されている(Khal'atbari 1376 h.sh.: 95-97)。地下式横穴墓については不明であるが、横穴墓に関して言えば、複数の遺体が埋葬されている例が多いとの情報も得られている。

3. 墓域の広がり

墓域は、通常、居住空間と推定される平坦面もしくは緩斜面の傍らに位置するという点については前述の通りである。その広がりに関して注目される点は次の通りである。

(1) 墓域が平坦面、もしくは緩斜面の傍らに位置する異なる地点に営まれるものがある。これは、全体として同一地点にある遺跡として理解されるものの、複数の平坦面や緩斜面があり、それぞれの傍らに墓域が営まれるもので、ルーキエ Luye 遺跡がその例として挙げられる(図6)。これは、同じ地点であっても時代的に居住空間として利用された場所が異なり、それに伴って墓域も異なる場所に営まれたものと推測される。

(2) 全体として一つの墓域をなす場合でも、墓域がいくつかの墓群に分かれており、隣接しながらも、多少の間隔をおいて広がっているものがある(図7)。この代表例としてはダーレスター Darestan 遺跡が挙げられる。これは、居住空間として利用された平坦面や緩斜面はほぼ同じ場所であり、それを囲むようにして、同じ地点に墓域が重ならないようにして少しづつ間隔をあけて墓域を営んだものと考えられる。

上述した異なる地点に墓域が営まれる例やこの間隔をあけて墓域が営まれている例では、同一地点の墓域であっても、それぞれ異なる時代に属する遺物が出土しているという情報が得られていることから、こうした移動や間隔は時代差を反映している可能性が高い。

(3) 墓が上下に重層して、つまり、掘り込みの深さを違えて構築されているものもあり、この代表例としてはキャラーラズ遺跡が挙げられる(図8)。この場合、上層には竪穴式土壙墓や竪穴式石槨墓が作られ、下層には地下式横穴墓が作されることになる。これは、その地点が利用された時期が長期間に渡っているか、もしくは、人口が多かったために墓として利用できる空間が乏しくなったことにより、同じ場所に墓が上下に重層して作られるようになったものと推測される。この場合、掘り込みの深さの違いは時代差を反映しているものと考えられる。

4. 墓域の年代

セフィードルード川西岸に点在する数多くの墓域の年代

については、一般に後期青銅器時代～初期鉄器時代であろうとされ、かなり時代的に限定されたものとして理解されている。しかしながら、キャラーラズでは後期青銅器時代からサーサーン朝時代に至るまでの墓が検出されているし (Hakemi 1973)、また、前述のように、同一地点にあるいくつかの墓群からは異なる時代に属する遺物が出土するとされている。加えて、イスラーム時代以後、現在に至るま



図6 ルイエ遺跡



図7 ダーレスター遺跡



図8 キャルーラズ遺跡

で墓域は同じような地点に営まれていることから (図9)、少なくとも後期青銅器時代以降、現在に至るまで同じ地点が墓域として利用されてきたと考えるのが適当である。

古代の墓域の在り方と「垂直方向の移牧」の関連性について

前述のように、古代の墓域は、現在ある集落（冬营地、夏营地）の傍ら、もしくはその下に存在しており、それ以外の地点では墓域が確認されていないことから、現在の集落の在り方を検討することが古い墓域の在り方を解明する手掛かりとなる。そこで、まず、集落の在り方に密接に関連しているこの地域でおこなわれている「垂直方向の移牧」を踏まえながら、集落の在り方について検討していくことから始めることとする。

1. 集落と「垂直方向の移牧」の関係

現在の集落はセフィードルード川に流れ込む支流によって形成される谷筋に沿って、水の得やすい場所に営まれている。これらの集落はこの地域の牧畜形態である「垂直方向の移牧」の拠点である「冬营地」と「夏营地」にあたっている。

この地域ではいわゆる「垂直方向の移牧」、すなわち、川岸の低地における暑い夏の気候と高地における冬の積雪を避け、良質の牧草を求めて、セフィードルード川の支流が形成する谷筋の一つに沿って、夏は低地から高地へ、そして、冬は高地から低地へと移動する形態の牧畜がおこなわれている。この移牧の拠点となるのが低地、つまり、川岸の段丘上にある冬营地（キャラーラズやジューベン Juben など）であり、高地にある夏营地（ドガミヤーン Dogamiyan やジューキーン Jukin など）である。一般に、冬营地は秋から春にかけての約8ヶ月間、そして、夏营地は夏の間の約4ヶ月間利用されるが、夏营地は積雪のある冬の間は無人となる。誤解のないように述べておくと、集落とはいっても、「夏营地」の場合には仮小屋やテントが利用されているため、恒常的な住居施設が構築されないことが多い。

こうした冬营地と夏营地は、移牧をおこなう集団にとっては慣習的に決まっている。つまり、ある一つの集団はある一つの谷筋に沿って位置する特定の冬营地と夏营地の間を行き来することになる。たとえば、冬营地であるジューベンに対応する夏营地は同じ谷筋の上方に位置するジューキーンである。

冬营地と夏营地の対応関係は、冬营地と夏营地が一対一に対応する場合と、一つの冬营地に対して複数の夏营地が対応する場合があるが、図10に示したように、一つの冬营地に対して複数の夏营地が対応する場合が一般的である。秋から春にかけて、一つの冬营地に拠って生活を営ん



図9 ジューベン遺跡（上層は現在の墓域）

でいる複数の集団が、夏の間はそれぞれの夏営地に分かれて生活を営むということになる。

2. 古代の墓域と冬営地、夏営地との関係

古代の墓域はこうした冬営地と夏営地の傍らに位置しており、また、こうした冬営地と夏営地の傍ら以外では古代の墓域は確認されていない。それゆえ、古くからこの地域ではこうした「垂直方向の移牧」がおこなわれ、同じような地点に冬営地と夏営地が営まれ、その傍らに墓域が形成されたものと推測される。

なお、現在、イラン高原部では牧畜の主体はヒツジおよびヤギであるが、この地域でおこなわれている「垂直方向の移牧」ではコブウシが主体となっている。東岸にあるマールリークを代表とするこの地域の遺跡からコブウシを現した動物形土器が多数出土していることは、古代においてもコブウシの移牧がおこなわれていた可能性を示している。

3. 同じ谷筋の異なる地点に位置する墓域の相互関係

数多く分布している墓域は冬営地と夏営地の傍らに営まれていることから、これらの墓域はそれぞれ独立したものではありながら、相互に関連しているものと考えられる。つまり、一つの集団が冬営地と夏営地をもち、それぞれの場所に墓を作ったものとすれば、一つの集団について異なる地点にある二つの墓域が存在することとなる。また、前述のように一つの冬営地に対して複数の夏営地が対応することが一般的であるので、この場合、一つの冬営地の墓域に対して複数の夏営地の墓域が対応することになる。

現在の墓域は冬営地に作られるようになっているが、現地での聞き取り調査によれば、道路が整備されて自動車の利用が一般的となる以前は、人が死亡した場合、その時点で生活している場所に、つまり、秋から冬であれば冬営地に、夏であれば夏営地に埋葬していたことが確認された。移牧の途中で事故や病気によって人が死亡した場合は、遺体を冬営地や夏営地に運ぶことはせず、その場に埋葬していたようである。こうした事例は、上述の推測を裏付けるものである。

4. 墓域の規模

セフィードルード川西岸に位置する墓域の規模は大小さまざまである。これは、その地点、つまり冬営地や夏営地に住んでいた人口や利用されていた期間の長さに因るものであることはいうまでもない。ここで注意すべき点は、冬営地に居住している期間の方が夏営地に居住している期間より長いという点、および、一つの冬営地に複数の夏営地が対応することが一般的である点である。それゆえ、一般に冬営地の墓域の方が夏営地の墓域より大きくなることが想定される。ちなみに、セフィードルード川西岸における最大の墓域は冬営地であるキャルーラズの墓域である。

おわりに

セフィードルード川西岸は出土する遺物からみて大きな一つの文化圏を形成しているが、この文化圏は、前述したように「垂直方向の移牧」によって有機的に関連しているいくつかの谷筋からなる文化圏である。谷筋ごとにまとまりを示す文化圏は、冬営地および夏営地において隣接する他の谷筋の文化圏と接触を持つことになる。また、夏営地は山の尾根近くに位置しているため、山の尾根を挟んで反対側にある谷筋の人々と接触する可能性もあり、これは他の文化圏との接触や交流を考える上でも興味深い。

本稿はセフィードルード川西岸に限定して古代の墓域の在り方を「垂直方向の移牧」形態によって解明しようとする一つの試論である。これを検証していくためには、考古学的調査のみならず、民族学的な調査が今後とも継続され

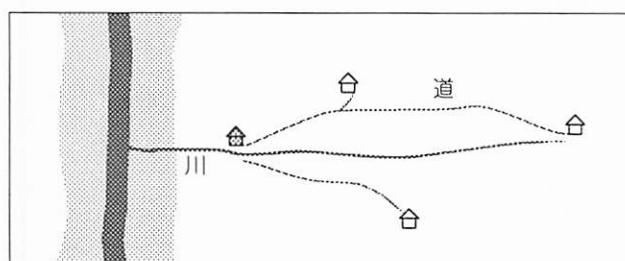
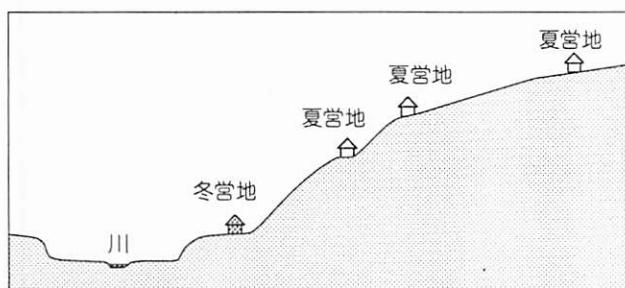


図10 冬営地と夏営地の模式図

ることが不可欠である。このような試論を検証することを通じて、ギーラーン州の他の地域のみならず、比較的地形が似ているアーザルバーイジャーン地方やその北にあるコーカサス地方などにおける集落や墓域の在り方を理解することが可能になっていくものと考えられる。

本稿は、東海大学で開催された日本西アジア考古学会第4回総会・研究会(1999年6月4、5日)における研究発表に加筆したものである。本稿では、イラン暦(h.sh.)と西暦を併用した。

註

- 1) これらの遺跡の調査については、山内和也 1998、Fukai and Matsutani 1980, Fukai and Matsutani 1982, Hakemi 1968, Hakemi 1973, Khal'atbari 1376 h.sh., Musavi 1374 h.sh., Negahban 1996 を参照。
- 2) この調査は(財)中近東文化センターの海外調査の一環としておこなわれたもので、日本側からは大津忠彦(代表者、中近東文化センター研究員)、岡野智彦(中近東文化センター研究員)、千代延恵正(東京大学東洋文化研究所・文部技官当時)、山内和也が参加した。この成果の一部は、中近東文化センター 1998 に紹介されている。
- 3) 図2はハルアトバリーKhal'atbariが1990/1年におこなった分布調査(Khal'atbari 1376 h.sh.: 110)をもとに作成したもので、中近東文化センターによっておこなわれた踏査の成果も一部追加してある。
- 4) ペルシア語では、竪穴式土壙墓は「ホフレイー khofre'i」、竪穴式石槨墓は「チーネイー chine'i」、横穴墓および地下式横穴墓は「ダフメイー dakhme'i」と呼ばれている。なお、横穴墓および地下式

横穴墓に用いられている「ダフメイー」の名称は、ゾロアスター教の「ダフメ」とは直接の関係はない。

参考文献

- Hakemi, A. 1968 Kaluraz and the Civilization of the Mardes. *Archaeologia Viva* 1/1: 63-65.
- Hakemi, A. 1973 Excavations in Kaluraz, Gilan. *Bulletin of the Asia Institute* 3: 1-7.
- Khal'atbari, M.-R. 1376 h.sh. Kavosh dar kaluraz [キャルーラズの発掘]. *Yadname-ye gerdhama'i-ye bastanshenasi-shush*. Tehran, Sazman-e miras-e farhangi-ye keshvar, 89-126.
- Negahban, E. O. 1996 *Marlik : The Complete Excavation Report*. Philadelphia, The University Museum, University of Pennsylvania.
- Musavi, S. M. 1374 h.sh. Bastanshenasi-ye gilan [ギーラーンの考古学]. 'Arabani, Ebrahim Eslah [編]. *Hameja-ye iran : ketab-e gilan* [イランの全土：ギーラーンの書]. *Jeld-e avval* [第1巻], 401-546. Tehran, Gruh-e pazhuheshgah-e iran.
- Fukai, S. and T. Matsutani 1980 *Halimehjan I : The Excavation at Shahpir*, 1976. Tokyo. The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo.
- Fukai, S. and T. Matsutani 1982 *Halimehjan II : The Excavation at Lameh Zamin*, 1978. Tokyo, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo.
- 中近東文化センター 1998 『ギーラーン 緑なすもう一つのイラン』。
- 山内和也 1998 「ギーラーンの考古学」『和光大学人文学部紀要』第33号 105-117頁。

山内和也
中近東文化センター
Kazuya YAMAUCHI
The Middle Eastern
Culture Center in Japan